

[A年] 聖霊降臨節第16主日(2021年9月1日)**【旧約聖書日課】 エゼキエル書37章15～28節**

15主の言葉がわたしに臨んだ。16「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユグおよびそれと結ばれたイスラエルの子らのために』と書き記しなさい。また、別の木をとり、その上には『エフライムの木であるヨセフおよびそれと結ばれたイスラエルの全家のために』と書き記しなさい。17それらを互いに近づけて一本の木としなさい。それらはあなたの手の中で一つとなる。18あなたの民の子らがあなたに向かって、『これらはあなたにとって何を意味するのか告げてくれないか』と言うとき、19彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはエフライムの手の中にあるヨセフの木、およびそれと結ばれたイスラエルの諸部族を取り、それをユグの木につないで一本の木とする。それらはわたしの手の中で一つとなる。20あなたがその上に書き記した木は、彼らの目の前であなたの手にある。21そこで、彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはイスラエルの子らを、彼らが行っていた国々の中から取り、周囲から集め、彼らの土地に連れて行く。22わたしはわたしの地、イスラエルの山々で彼らを一つの国とする。一人の王が彼らすべての王となる。彼らは二度と二つの国となることなく、二度と二つの王国に分かれることはない。23彼らは二度と彼らの偶像や憎むべきもの、もろもろの背きによって汚されることはない。わたしは、彼らが過ちを犯したすべての背信から彼らを救い清める。そして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。24わたしの僕グビデは彼らの王となり、一人の牧者が彼らすべての牧者となる。彼らはわたしの裁きに従って歩み、わたしの掟を守り行ふ。25彼らはわたしがわが僕ヤコブに与えた土地に住む。そこはお前たちの先祖が住んだ土地である。彼らも、その子らも、孫たちも、皆、永遠に至るまでそこに住む。そして、わが僕グビデが永遠に彼らの支配者となる。26わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らの住居を定め、彼らを増し加える。わたしはまた、永遠に彼らの真ん中にわたしの聖所を置く。27わたしの住まいは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。28わたしの聖所が永遠に彼らの真ん中に置かれるとき、諸国民は、わたしがイスラエルを聖別する主であることを知るようになる。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一1章10～17節

10さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心一つにし思い一つにし

て、固く結び合いなさい。11わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。12あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言っているとのこと。13キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。14クリスとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を授けなかったことを、わたしは神に感謝しています。15だから、わたしの名によって洗礼を受けたなどと、だれも言えないはず。16もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を授けましたが、それ以外はだれにも授けた覚えはありません。17なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。

【福音書日課】 マタイによる福音書18章10～20節

10「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。†(11人の子は、失われたものを救うために来た。)」12あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。13はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。14そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

15「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。16聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。17それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。」

18はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。19また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。20二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書37章15～28節

15主の言葉が私に臨んだ。16「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダとその友イスラエルの子らのために』と書き記しなさい。またもう一本の木を取って、その上に、『エフライムの木であるヨセフとその友であるイスラエルの家すべてのために』と書き記しなさい。17それらを互いに近づけて一本の木としなさい。それらはあなたの手の中で一つとなる。18同胞〔直訳→民の子ら〕があなたに向かって、『これらはどういう意味なのか、我々に告げてくれないか』と言うとき、19彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。私はエフライムの手の中にあるヨセフの木とその友イスラエルの諸部族を取り、これらをユダの木と合わせて、一本の木とする。これらは私の手の中で一つとなる。20あなたの書き記した木が彼らの目の前であなたの手の中にあるとき、21彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。私はイスラエルの子らを、行った先の諸国民の間から取り戻し、周囲の国々から集め、彼らの土地に導き入れる。22私はその地、イスラエルの人々で彼らを一つの国民とする。一人の王が彼らすべての王となる。彼らは二度と二つの国民とはならず、もはや二度と二つの王国に分かれることはない。23彼らは二度と偶像や憎むべきものや、もろもろの背きによって汚されることはない。私は彼らを、罪を犯させるあらゆる背きから救い、清める。彼らは私の民となり、私は彼らの神となる。

24わが僕ダビデが彼らの王となり、彼らすべての者のために、一人の牧者となる。彼らはわが法に従って歩み、わが掟を守り、これを行う。25彼らは、私がわが僕ヤコブに与えた地、すなわちあなたがたの先祖が住んでいた地に住む。彼らもその子らも、その子孫もどこしえにそこに住み、わが僕ダビデが永遠に彼らの指導者となる。26私は彼らと平和の契約を結び、これは永遠の契約となる。私は彼らを祝福し、増やす。私はわが聖所をどこしえに彼らのただ中に置く。27わが住まいは彼らと共にあり、私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。28こうして、わが聖所がどこしえに彼らの中にあるとき、諸国民は私がイスラエルを聖別する主であることを知るようになる。」

コリントの信徒への手紙一1章10～17節

10さて、きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの名によってあなたがたにお願いします。どうか、皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心をつにし思い一つにして、固く結び合いなさい。11私のきょうだい

たち、実は、あなたがたのことをクロエの家の者たちから知らされました。あなたがたの間に争いがあり、12あなたがたはめいめい、「私はパウロに付く」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」などと言いつつ合っているとのこと。13キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたが洗礼を受けたのはパウロの名によるのでしょうか。14クリスとガイオのほか、あなたがたの誰にも洗礼を授けなかったことを、私は神に感謝しています。15ですから、私の名によって洗礼を受けたなどと、誰も言えないはず。16もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を授けましたが、そのほかには誰にも授けた覚えはありません。17キリストが私を遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架が空しくならないように、言葉の知恵を用いずに告げ知らせるためだからです。

マタイによる福音書18章10～20節

10「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天にあっていつも、天におられる私の父の御顔を仰いでいるのである。†〔11人の子は、失われたものを救うために来た。〕12あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残して、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。13よく言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。14そのように、これらの小さな者が一人でも失われることは、天におられるあなたがたの父の御心ではない。」

15「きょうだいあなたがたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。16聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証言によって確定されるようになるためである。17それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なさい。」

18よく言っておく。あなたがたが地上で結ぶことは、天上でも結ばれ、地上で解くことは、天上でも解かれる。19また、よく言っておくが、どんな願ひ事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。20二人または三人が私の名によって集まる場所には、私もその中にいるのである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・9月5日「聖霊降臨節第16主日」の日課主題は「教会の一致と交わり」。旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、「枯れた骨の復活預言」に続く「民の回復預言」の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、冒頭で教会における党派争いの噂を聞いたパウロが仲たがいをいさめる箇所。福音書日課は、「マタイ福音書」から、「迷い出た羊のたとえ」を経て教会共同体における「小さな者」への配慮を説く箇所。

旧約日課(エゼキエル 37 章より)

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の三番目に置かれた預言書。「預言者エゼキエル」の人物像は、1章で描かれているとおり。南王国エルサレム神殿の祭司を父とし、王国滅亡前の初期バビロン捕囚(前598年ごろ)に父と共にバビロンに移住させられ、同地で祭司任職を受け、預言活動を始めた。おそらく、捕囚としてバビロンに移住した元王族・貴族に仕える助言者として「宮廷預言者」同様の立場で預言活動をおこなったと考えられる。初期バビロン捕囚以降、バビロンには、バビロニア王ネブカドネザルによるエルサレム包圍戦の中で王位を継承し三か月で退位させられたヨヤキンが幽閉状態で置かれていたが、ヨヤキンはネブカドネザル王の死後に後継王エビル・メロダクによって名誉回復しており(王下25:27以下)、ネブカドネザル王治世下でも元王族としての尊厳が保たれるような生活を保障されていたと考えられる。ヨヤキンの子または孫にあたるシャルティエルは、バビロン捕囚解放後、ペルシア王キュロスによってユダ総督に任じられ、またその子ゼルバベルはエルサレム神殿再建の責任者であったと伝えられている(エズラ記)。

・「エゼキエル書」の預言は、バビロニアによる王国滅亡の事態を踏まえたユダに対する裁き、またバビロニアを含めた諸国に対する裁きが前半を占めるが、後半は、もっぱら、「民」の回復と、エルサレムの「神殿」の再建を幻として預言するものとなっている。「民の回復」は、「ダビデのような王」が再び立てられて、神の直接統治に比する王国再建が為されるものとして預言されるが、そのことを告げるに際して用いられるのが、「羊飼いと羊のたとえ」(34章)と「枯れた骨の復活の幻」(37章)である。日課箇所は、これらの預言の集約として、「ユダの民」再建のみならず、先にアッシリアに滅ぼされた北王国イスラエル＝エフライムの「民」をも含めた「大イスラエルの民」再建が預言されている。「大イスラエル主義」は、アッシリアによって北王国が滅ぼされた後、特にヨシヤ王時代の改革に伴って主唱されるようになった国家観で、その祖型をダビデ・ソロモン時代の南北統一連合王国に見ている。また、神学的根拠は、モーセに遡る「律法」の継承に置かれている。

使徒書日課(Ⅰコリ1章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロがコリント教会に宛てた一連の書簡の一つ。先主日の使徒書日課に続いて。概説は前回資料参照。

・日課箇所は、書簡本論の冒頭。パウロは、協力者や支持者を通してコリント教会の状況を伝え聞いており、問題と受けとめた事案について、本書簡で具体的に助言を与えようとしている。ここでは、教会内の党派争いによる仲たがいを問題として取り上げ、論を展開し始めている。ここから始まる論は3章末まで続く。

・パウロは、バルナバ宣教団から独立して独自の宣教団を組織した最初の宣教旅行におけるマケドニア・アカイア伝道の一環としてコリント教会の創設に携わったが(使徒18章)、その後の宣教旅行では、もっぱらエフェソをはじめとするアジア州を拠点に据えていたと推察される。そのような中でコリント教会は、アポロやケファ(ペトロ)など名だたる巡回宣教者を迎えて、教勢を拡大していったのだろう。ところが、コリント教会では、誰を信仰の師とするかで党派的な動きが生ずるようになったと推測される。これは、だれから洗礼を受けたかということと結びついた師弟関係を強調することから起こったと考えられる。当時の一般的な「洗礼」理解には、授洗者と受洗者の間に特別な師弟関係が結ばれるという考えがあった。

・12節「わたしは〇〇に(つく)」は、いずれも「わたしは〇〇のもの」という「〇〇」の属格表現。帰属関係を表すものであるが、パウロはここから始まる議論を、同様の属格表現で、3:23「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの」と閉じている。教会における党派的対立に対する解決の道を、パウロは、この単純な「わたしたちはキリストのもの」という自己理解を共有することに見いだしているのである。そこで、洗礼理解もまた、12:13で示されるように、授洗者との関係ではなく、ただキリストとの関係をしるしづけるものとされる。

福音書日課(マタイ18章より)

・日課箇所を含む18章全体は、弟子との対話を通して語られた主イエスの一連の教え(説教)としてまとまりを見せている。主イエスの教えは、弟子たちが「だれが天の国で一番偉いのか」と問うことから始められ、「これらの小さな者」への最大限の配慮が為されるべきこと、それは罪を犯したことに対して無限に赦しを与え続けるほどのものであることとして展開する。一方、「マタイ福音書」は、この一連の教え(18章)が発せられたきっかけとして、「神殿税を納めることに関する逸話」(17:24~27)を直前に置いて、「そのとき」(18:1)の接続詞で関連付けている。おそらく、17:27「彼らをつまずかせ(スカンダリゾー)ないように」が、18:6「これらの小さな者の一人をつまずかせる者は」以下と結びつけて理解するように置かれているのであろう。「子供」については、17:25,26が「ヒュイオス」の訳、18:2以下が「パイディオン」で、関連付けはない。

・日課箇所前半の「迷い出た羊のたとえ」は、ルカ福音書 15:3~7 にほぼ同じたとえが現れるが、語られた文脈は大きく異なる。ルカの場合は、ファリサイ派の人々の批判に対して、「徴税人や罪人」に対する積極的な受容を神の御心として示すために語られたものとされている。一方、日課箇所のマタイの場合は、教会共同体を構成する弟子たちに対して、「これらの小さな者」と呼ばれる人々に対する最大限の配慮が求められていることを示すために語られている。

・日課箇所後半(15 節以下)は、ルカ福音書 17:3 に並行箇所と見られる短い句が知られるが、マタイの場合は、より具体的な「共同体」的手続きを示している。すなわち「共同体」内の相互において「罪」の問題として生じるトラブルに際して、まずは当事者同士で、次には仲介者(第三者)を交えて、最後には教会共同体の権威(おそらく指導者の判断を指している)によって解決し、和解するようにと勧告されている。最終段階で「その人を異邦人か徴税人と同様に見なさない」(17 節)とあるのは、共同体からの追放や資格停止を意味するものでないことは、9:11 以下などの逸話からも明らかである。

・18 節「あなたがたが地上でつなぐことは…」は、16:19 でペトロに告げられたことの繰り返しであるが、これが共同体の特定の者だけに付与された権威であるのかどうかは、はっきりしない。しかし、19~20 節「あなたがたのうちの二人が地上で心を一つにして求めるなら…」が、これまでの文脈で「罪」の問題でトラブルになっている当事者同士のことと推認されうるとすれば、この権威は共同体全体(全員)に付与されたものとして理解されていることになる。すなわち、この「二人または三人が…」は、いわゆる祈りの交わりを意味するのではなく、主のもとでの和解の場を意味する。

来週の誕生日 (9月5日~11日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-19 番「み栄え告げる歌は」は、20 世紀後半に起こった英語讃美歌創作運動の中心人物の一人、フレッド・P・グリーン(=E)の作詞。グリーンは英国メソジスト教会の牧師。曲は、19 世紀後半~20 世紀にかけて英国で教会音楽家として活躍した C・V・スタンフォードの作曲。この曲は、元来、「この世にあかし立てて」(379 番)のために作曲されたが、転用された。

・21-200 番「小さいひつじが」(=E)55 番)は、19 世紀英国で金物商を営みながら讃美歌創作を続けたアルバート・ミッドレーンの作詞。曲は、ロンドンで活動したイタリア人作曲家サルヴァトーレ・フェレッティの原曲から。

・21-524 番「われらみ名により」は、20 世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20 世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。

21-19「み栄え告げる歌は」

When in Our Music God is Glorified

1. When in our music God is glorified, / and adoration leaves no room for pride, / it is as though the whole creation cried: / Alleluia!
2. How often, making music, we have found / a new dimension in the world of sound, / as worship moved us to a more profound / Alleluia!
3. So has the church, in liturgy and song, / in faith and love, through centuries of wrong, / borne witness to the truth in every tongue: / Alleluia!
4. And did not Jesus sing a psalm that night / when utmost evil strove against the light? / Then let us sing, for whom he won the fight: / Alleluia!
5. Let every instrument be tuned for praise! / Let all rejoice who have a voice to raise! / And may God give us faith to sing always: / Alleluia!

21-200「小さいひつじが」

A Little Lamb Went Straying

1. A little lamb went straying / Among the hills one day, / And left its faithful shepherd / Because it loved to stray; / And while the sun shone brightly, / It knew no thought of fear, / For flowers around were blooming / And fragrant was the air.
2. But night came over quickly, / The hollow breezes blew - / The sun soon ceased its shining, / All dark and dismal grew; / The little lamb stood bleating, / As well indeed it might, / So far from home and shepherd, / And on so dark a night.
3. But ah! the faithful shepherd, / Soon missed the little thing, / And onward went to seek it, / Safe home again to bring: / He sought on hill, in valley, / And called it by its name - / He sought, nor ceased his seeking, / Until he found his lamb.
4. His strong arms gently lifted / The lamb against his breast, / And as he bore it homeward / He fondly it caressed; / The little lamb was happy / To find itself secure; / And happy, too, the shepherd, / Because his lamb he bore.
5. And won't you love the Shepherd, / So gentle and so kind, / Who came in brightest glory / His lambs on earth to find! / To make them, oh, so happy, / Rejoicing in His love, / Till every lamb be gathered / Safe in His home above.

21-524「われらみ名により」

Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.